

Title	MIPS2020 三田哲学会哲学・倫理学部門例会オンライン
Sub Title	
Author	
Publisher	三田哲學會
Publication year	2021
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.147 (2021. 3) ,p.167- 169
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000147-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

MIPS 2020

三田哲学会 哲学・倫理学部門 例会オンライン

MIPS ホームページ上にて公開

(2020 年 11 月 7 日～12 月 13 日公開)

<https://sites.google.com/keio.jp/mips>

プログラム

個人研究発表

哲学分野

中根 杏樹 君 (文学研究科博士課程)

題目「理由内在主義はいかにして客観的な理由を説明しうるか」

要旨「ある行為者 A には特定の行為 ϕ を為すべき理由がある」といった規範的な理由に関する言明の真理は、A の欲求に依存しているのか？ 理由内在主義は、A の欲求に依存していると考え、理由外在主義は、そのような考えを否定する。理由外在主義が理由の欲求への依存を否定するひとつの根拠は、「A には泥棒をしてはいけない理由がある」といったことは、A の欲求に関わらず客観的に妥当すると考えるからである。この根拠には強い説得力がある。理由内在主義はなんらかの仕方で客観的な理由に説明を与えなければならないだろう。では、理由内在主義は、いかにして客観的な理由を説明しうるのか？ 発表者は、まず、ムーア (Moore, A. W.) 『理性は気高く、力は限りなく』(2003) にもとづきつつ「客観性」それ自体を明確化し、(1) 世界に方向付けられた客観性と、(2) 結論に方向付けられた客観性、という客観性の二つの意味を取り出す。そして、理由内在主義は、「みなが共有する欲求」にもとづいて二つ目の意味における客観的な理由を説明しうると論じる。」

山崎 諒 君 (文学研究科博士課程)

題目「ハイデガーにおける「存在様式」と「真理」の関係について」

要旨「本稿の眼目は、前期ハイデガーにおける「真理論」にかんして、「存在様式 (Seinsweise)」ないし「いかにあるか (Wie-sein)」という観点から検討することにある。これまでの研究史上、ハイデガーの真理論をめぐっては、とくに E・トウーゲントハットの記念碑的な著作『フッサールとハイデガーにおける真理概念』(1970) 以来、さまざまな議論が重ねられてきた。しかし、そこで主たる

関心の的になっているのは、存在者の「何内実 (Wasegehalt)」ないし「何であるか (Was-sein)」であったと云える。それにたいして本稿は、「いかにあるか」という観点を重視した解釈を試みることになる。なお、こうした解釈筋は恣意的なものではない。発表者は先に、前期ハイデガーの思索においては「何であるか」と「いかにあるか」が重要な両輪となっていることを論じたほか、実のところハイデガー自身が、1928/29年の冬学期講義『哲学入門』の一部で「存在様式」と「真理」について論じているのである。それゆえ本稿は、こうした観点から「いかにあるか」ないし「存在様式」と「真理」との関係を分析し、ハイデガーの真理論をめぐる議論において一定の寄与をなそうとするものである。」

豊田 泰淳 君 (文学研究科博士課程)

題目「プロティノスにおける「二重のエネルギー理論」再考」

要旨「プロティノスの存在論構想を支える原理は、しばしば「二重のエネルギー理論 (=DAT=Double-Act Theory)」と呼ばれる原因論としてまとめられる。これは、その名が示す通り、アリストテレス由来の説明項を導入したものであるが、その内実はプロティノスによる独自のエネルギー解釈であり、結果として所謂発出論を中心に据えた新しいプラトン主義を展開する際の道具立てとなるものである。本発表は、プロティノスが DAT の着想に至った思想史的文脈を考慮に入れ、DAT によるプラトン解釈の有効性を検討する。具体的には、プロティノスがプラトンの『ティマイオス』篇を解釈する場面を取りあげる。プロティノスは、多学派からの批判に応え、『ティマイオス』篇の所謂デミウルゴス神話を修正し、可感界生成の理由付けを与える必要があった。その中でデミウルゴスに代わる説明項として持ち出される DAT に関して、念頭に置かれた批判対象と、そのプラトン解釈としての有効性を明らかにすることを目指す。」

石田 隆太 君 (文学部訪問研究員)

題目「シンプリキオス『カテゴリー論注解』の使用法：トマス・アクィナスの場合」

要旨「本発表は、シンプリキオスの『カテゴリー論注解』がトマス・アクィナスの思想のどのような側面において重要性をもつのかを明らかにすることを目指す。シンプリキオスは古代におけるアリストテレス注解者の一人である一方、トマスは中世におけるアリストテレス注解者の一人である。『カテゴリー論』は、少なくともトマスにとっては存在論を構築するうえで欠かせない典拠の一つであった。実体と附帯性、あるいは量、性質、関係といった附帯性の各種に関する彼の理解は、主著『神学大全』においてもさまざまな場面で前提されており、

それは高度に神学的な話題においてもそうである。彼の『カテゴリー論注解』がもし存在するなら、それを頼りに彼の『カテゴリー論』理解を検証することが可能だが、残念ながら彼による注解は私たちのもとに残されていない。おそらくその代わりに彼は、従来用いられてきたポエティウスによる注解などに加えて、シンプリキオスによる注解を中世において早くから使用した。このことが彼の思想にどのような影響を及ぼしているのかを検証することにしたい。」

倫理学分野

五味 竜彦 君（文学研究科博士課程）

題目「性格概念へのナラティブアプローチ」

要旨「徳の概念が現代倫理学における主題のひとつとなって久しいが、近年、その中核をなす性格特性の概念に対する疑念の声が生じている。中でもミラー (Miller, Christian) は、実際に人々の有する性格が様々な道徳的側面をもつ、混在した性格特性であると分析し、従来の徳と悪徳に対する見解の修正を求めている。本発表はこうしたミラーによる「現実主義的挑戦」に、以下の方法で回答を試みる。まず彼の「混在した性格概念」の理論を概観した後に、行動や振舞いの意味の理解に必要と考えられるナラティブな視点の重要性と特徴を説明する。ここでは主に、性格が、人生という長期的な過程を構成する一要素としてのみ理解可能である点や、一時的なものではなく他人との交流の中で持続・変化するという点を論じていく。最後に友愛の概念を用いることで、時に抑圧的になりうるナラティブな人物理解の含む問題が、克服可能であるかを検討する。」

水野 俊誠 君（文学部非常勤講師）

題目「バトラーによる、良心の権威の擁護論」

要旨「バトラーの考えでは、人間本性は三つの階層から成る体系である。最も上の階層に置かれているのは、良心あるいは反省の原理である。第二の階層には、自己愛の原理と仁愛の原理がある。そして、最も下の階層には、個々の欲求、情念、情愛がある。良心とは、人が自らの心情、気質、行為を区別し、それらを是認または否認する原理である。自己愛とは、自分自身の幸福への一般的欲望である。仁愛とは、社会の安全と善への一般的欲望である。個々の欲求、情念、情愛とは、それぞれの対象に向かう直接的で単純な傾向である。良心は、人間本性の他の全ての構成要素を指導し統制する権威を有する。では、良心が権威を有するという自らの見解を、バトラーはどのように擁護しているのだろうか。幾つかの解釈を検討して、この問いに答えることにしたい。」